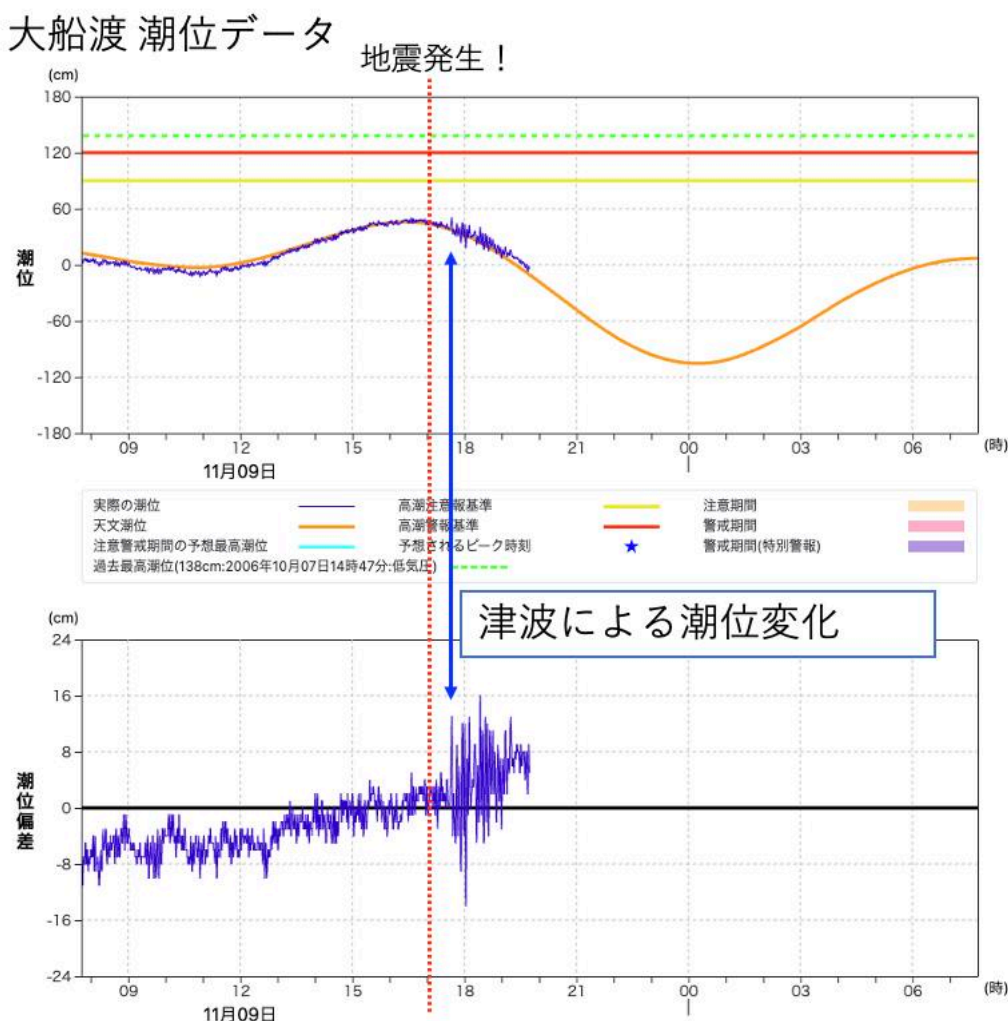


岩手沖でマグニチュード6.9の地震発生

11月9日の午前中に10日配信予定のニュースレターを作成後、10日17時03分に岩手県沖合でマグニチュード6.7(速報値)の地震が発生し、津波注意報が岩手県沿岸に発令されました。その後、気象庁はマグニチュード6.9(暫定値)と変更しました。

一般にマグニチュード6.5程度の地震では、断層運動が海底面まで到達しないので、津波注意報にはならないのが普通です。そのため6.7で注意報が発令されたのには少し違和感がありました。その後、6.9に修正されたのでこの大きさであれば注意報が出てもおかしくありません(マグニチュードの変化を地震のエネルギーで表現しますと、M6.5を1とするとM6.7は2、M6.9は4という関係となります)。なお20時20分、気象庁は岩手県沿岸に出ていた津波注意報を解除いたしました。次にお示しする図は大船渡における潮位変化です(横軸は24時間)。地震発生前から潮位(潮位偏差)が上昇していますが、これは低気圧の接近によるものです。



11月に入ってからの一連の岩手沖での地震活動は、今週のニュースレターでも見る事のできる青い静穏化領域の南側のすぐ近くで発生しています。

多くの場合、静穏化が発生している領域と実際に地震活動が発生する場所は、静穏化領域の中心というよりその縁辺部で発生する事が多く、11月9日の地震はまさに静穏化領域の縁辺部で発生しており、この静穏化に対応する地震と言えるかもしれません。

DuMA ニュースレター

2025年11月10日

東北沖で少し地震活動活発化か

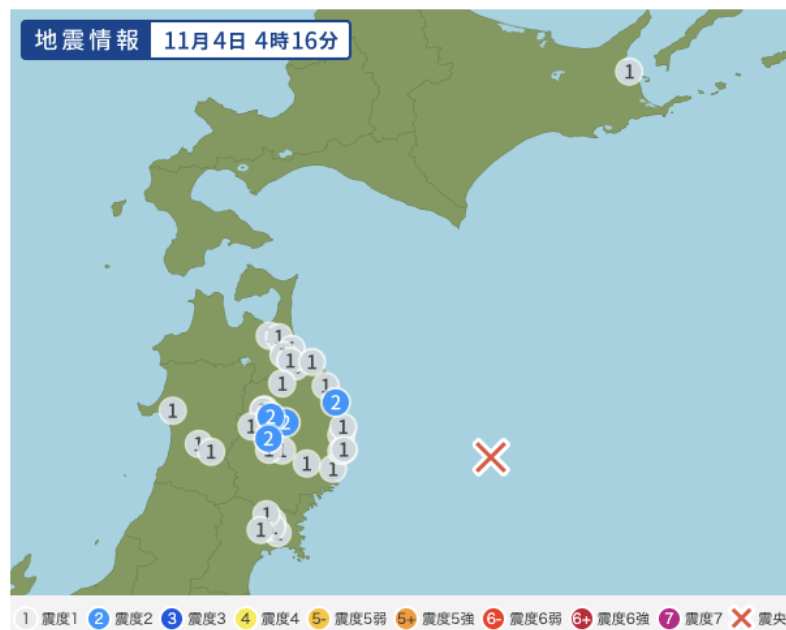
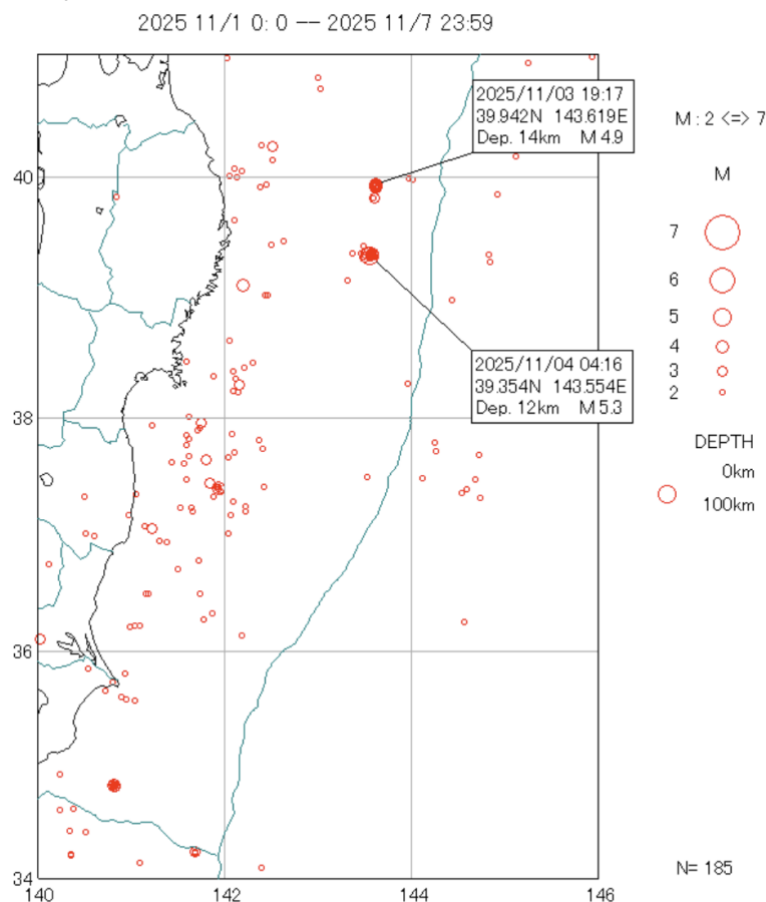
東北沖、特に岩手県の沖合で11月になってから、少しまとまった地震活動が発生しています。一般的には地震活動が活発化してもそれが大地震につながる可能性はあまり大きくありません。そのまま地震活動が収束してしまう例が多いのも事実です。

将来大地震につながる地震活動活発化の特徴として、発生する地震のマグニチュードが時間の経過とともに大きくなるとか、その発生間隔がだんだん短くなる、粒揃いの中規模地震が続くというような地震活動活発化は注意が必要と考えられています。

右側にお示しする図は11月1日から7日に発生したマグニチュード2以上の地震活動です。

また下にお示しする図は気象庁が発表している速報値(7日まで発表されている)の中で唯一有感となった11月4日のマグニチュード5.3の地震による震度分布です。

陸からの距離が離れていますので、マグニチュード5を超えた地震にもかかわらず、気象庁の地震速報だけではこの岩手沖で地震がまとまって発生している事に気が付く事ができません。



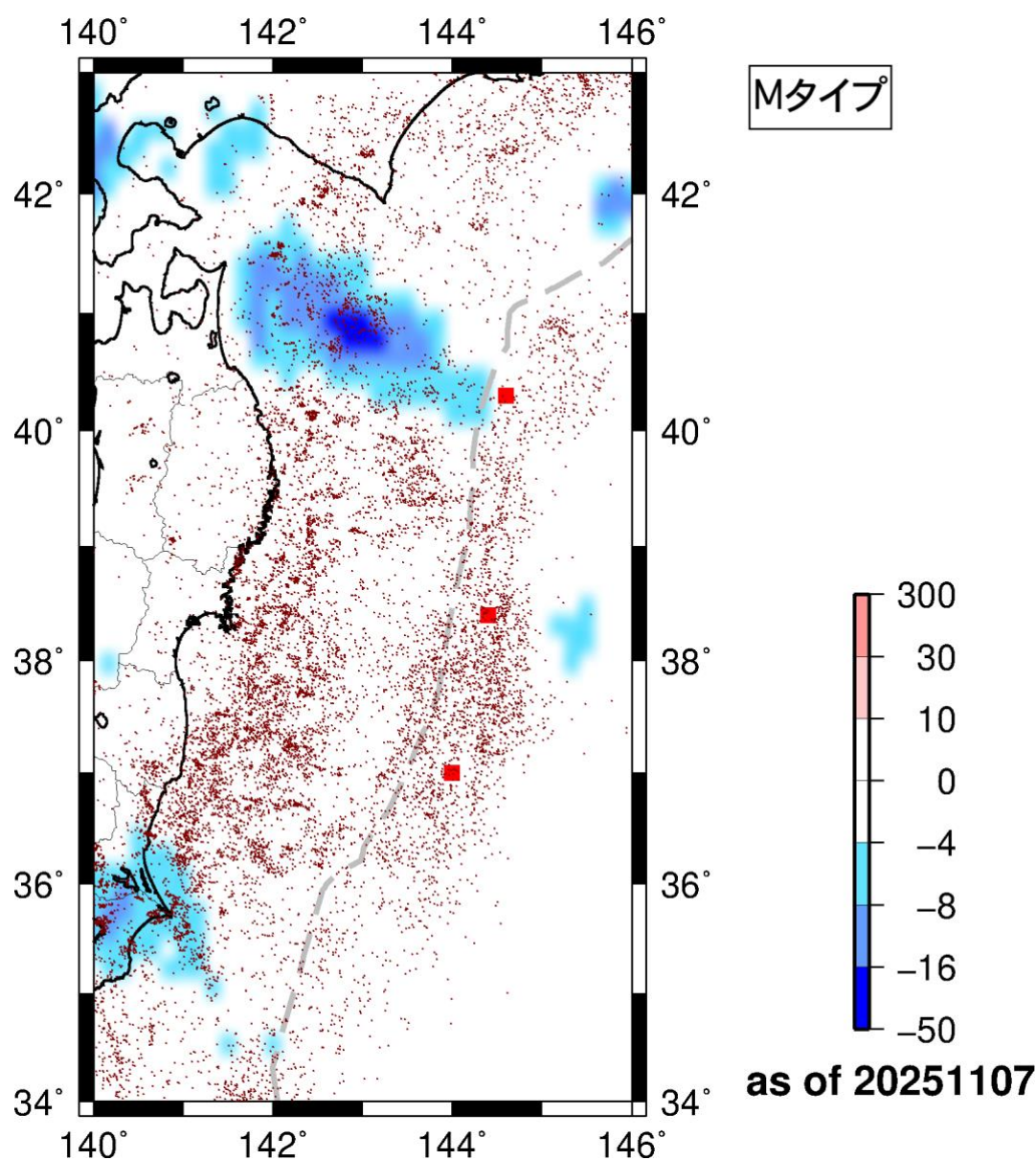


10月6日付のニュースレターで、やはり東北地方の宮城県沖アウターライズ地域(日本海溝より、東側の地域)で群発地震活動が開始したという事をお伝えしましたが、東北沖がかなりこれまでの状態と違ってきたと言えるかと思います。

来年3月で、東日本大震災から15年が経過します。東北沖の地震発生の状況が新たな段階に入ったと考えるのがいいのかもしれません。

東北地方海域の地下天気図®

今週は11月7日時点の東北地方海域の M タイプ地下天気図をお示しします。青森県沖・北海道南東沖の日本海溝の地震活動静穏化(図で青い部分)は M タイプでも L タイプ地下天気図でも出現しており、確度の高い異常と考えています。



また今週の地下天気図で特徴的な変化が出現しました。前回の解析ではみられなかった地震活静穏化が関東地方にも出現するようになりました。